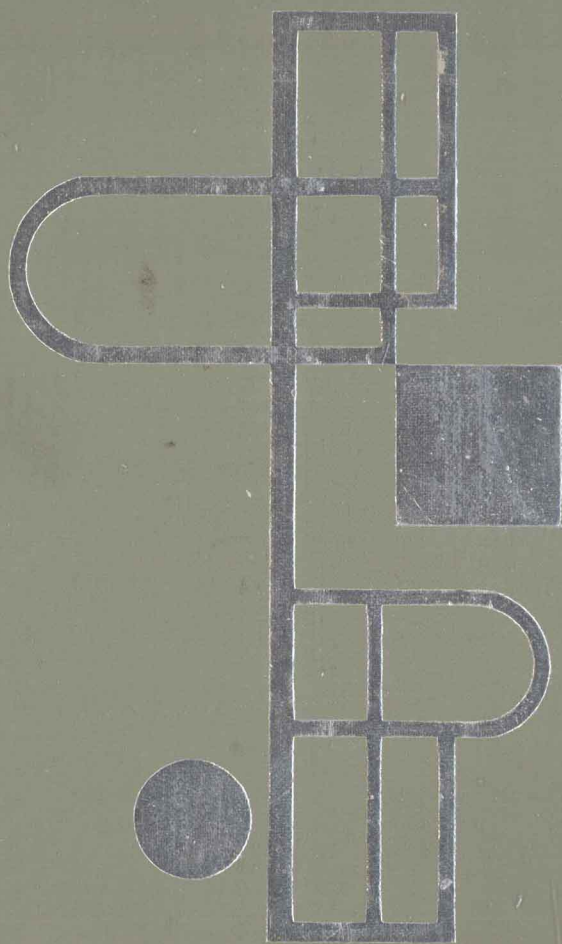


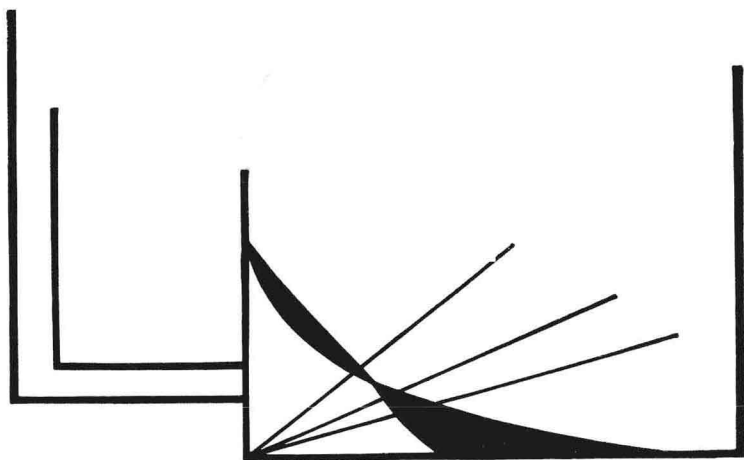


戰後小說集

(一)

新選 現代日本文學全集

32



筑摩書房版

戦後小説集(一)

昭和三十五年九月十五日 発行

著者 由起しげ子

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京元局 例七六五一（代表）
振替 東京 一六五七六八

製版 株式会社精興社
印刷 株式会社精興社
本製 和田製本工業株式会社

戦後小説集(一) 目次

由起しげ子

指環の話

矢車草

大田洋子

半人間

長谷川四郎

可小農園主人

阿久正の話

松本清張

或る「小倉日記」伝

斯波四郎

山 塔

小山 清

桜 林

大原富枝

ストマイつんぼ

沢野久雄

夜の河

霜多正次

軍作業

小島信夫

アメリカン・スクール

神のあやまち

島尾敏雄

夢の中の日常

鉄路に近く

有馬頼義

文野の犯罪

110

101

4

46

76

3

21

5

131

151

17

16

16

19

16

16

中村真一郎	二五
恋の重荷	二五
城への道	二七
福永武彦	二八
世界の終り	二八
小沼 丹	三〇
村のエトランジエ	三〇
金 達寿	三三
朴達の裁判	三三
安岡章太郎	三五
ガラスの靴	三五

遁 走——第一部——	三六
阿川弘之	三六
鱸とおこぜ	三六
野 藤	三七
解 説	四六
山本健吉	四六

装 幀
恩地孝四郎
恩地 邦 郎

戰
後
小
說
集
(一)



由起しげ子

指環の話

姉がまったく危篤に陥つてから七日ほど経つたとき、彼女は仰臥している胸のあたりに半紙を私に支えさせ、力無い手で毛筆を持つてそれ

に、「枕もとの白い箱におかあさんのユビワがはいっている」

と大儀そうに書いた。そして言いようのないかなしい、いかめしい顔で私をみつめた。

「それをどうするの」

と私は何でもないように訊いた。私は心の中で、とうとうこんなことを書くようになった、と暗い筈に引きこまれてゆくような気持だつたが、姉の見つめる眼に彼女が期待する反応を探りとらせることを躊躇つた。姉は落窪んだ眼窩の中

の大きい眼にさらに一そうの思いをこめて、瘡せて突つた顎をしゃくりあげ、「あなたのものにせよ」と言うような合図をした。私はだまつて姉の顔を見ながらうなずいた。私には姉の真意を読みとることが出来たが、私の後ろの附添人用の長椅子には姉の娘の月子が掛けてじつと二人の話を聴いている。私はすこし酷いとは思つたが、

「誰にあげるんですの、月子？」

と訊ねた。すると姉は眼に怒りを含めて峻しく否定し、骨ばかりの腕の首の方をゆつくりもちあげて、びつたりと私の胸をさし示した。そしてもう一度、毛筆と紙を求めて、

「大切にせよ」

とぶつつけるように書いた。

この指環が姉にとつてどのようなものであつたか、それを知っているのは私だけである。それは姉のただ一人の娘である月子でさえも知らないことであつた。すこしでも曖昧な疑問を後日に残さぬために、私は月子の思惑を考え、月子の眼の前で、姉の口から指環の所屬が移される先を明らかにさせておく方がよいと思つたの

で、問い訊はしたが、指環は月子に譲られる筈のものではなかつた。それは姉が母親として月子を愛していないということとは直接には関係のないことなのだ。それは姉が三年間、半身を起すことも出来ない、殆んど奇蹟的とも云える重態の連続のなかで、異常な意志力で死の影を払いのけながら、その一方にいよいよ拒否することの出来ない事実として死が襲つて来たとき、是非とも取り行わねばならぬ厳肅な儀式として、心の片隅に不断に怠りなく用意しつづけて来た神秘的な行事なのであつた。私はそのことを、実はすっかり忘れていた。そして、至急電報に促されてこの病院にかけつけて来てから七日間、その間一刻も眼を離すまいと病床の傍らに姉が後ろ向きにじりじりと死の方へ押されてゆくさまを見まもりつづけているうちに、私はふと全く忘れ去つていたその指環のことを思い出したのだつた。——あの指環を、姉はどこかにしまつて持つている筈である。その指環の授受をすませないうちは、姉は息を引きとることは出来ないのだ。姉は神戸の病院、私は東京と遠くに離ればなれになつていて、私はそれまでも何度姉が私の知らないうちに生命の灯を消しているのではないかという不安に脅かされねばならないかわからなかつたが——電報を見て汽車でかけつけて来る間もどんなにその恐ろしい想像に苦しんだか知れないのだつたが——姉は指環を私の手に渡すまでは死ぬことは出来なかつたのだ、と言うことに私ははつきりと思

い当つた。それは是非とも行われなければならぬことであつた。その時が遂に來たのだ。

それはやつぱり省略することの出来ない手続きであつたのだ。

私はそう思うと、二人の姉妹にとつて神聖な式事であり、また同時に姉の死の最後の告知でもあるその指環授受の瞬間を、さすがに畏怖に似た全身の緊張で受けとめねばならなかつた。しかし、私には同時にそれを拒否し、抹殺したい衝動が強く働くのを抑えることが出来ないのだつた。それは、そのことを受容することが姉の死の予感を認めることになるという憚りからでもあつたが、それ以上に、姉と私とを長い間隔てていた一種の隔離の大本の核心であつたようなその小つぽけな装身具の受け渡しを、姉と一しよに、同じ重要さと物々しきで行いたくないという、冷めたい引き退いた氣持が私の心の底にあるからであつた。

「よく分りましたわ。でも今までも何べんも持ち直したでしょう？　大丈夫よ、氣をおとさないで——」

結局私はそんなお座なりで言葉をにぞす外はなかつた。それでも姉はそれだけのことを私にわからせると、何か心の重荷を下した人のような満足の面持で臉を合せた。姉はまた深い昏睡にかえつて行つた。

指環というのは霧雨が窓ガラスに吹きつける雫ほどの小さい一粒のダイヤを嵌めこんだ金の

指環であつた。私たちの母がまだ若かつた頃に、父が大阪の堀米という貴金屬商から買い与えたもので、性のよい光りを持つてゐる。今から三十六年前、母はその指環を長病いのはての死の床で、苦しい息の下から、自分で自分の指から抜きとつて、姉の掌に握らせたのである。そのとき姉は十五歳、主治医、看護婦、祖母、父、兄、私たちがとりまいて見まもつていた中での指環のうけわたしは劇的であつた。母はそれから何十分もたたないうちに息をひきとつた。私はまだ幼くてものの役にも立たず、日頃は病室への出入りも禁じられていたので、その時の情景はなにかとくべつに神聖でおそろしい氣がした。もちろん、主治医が母の呼吸や臉の反応をしらべて膝の上の大きい饅頭時計にちらと眼をおとして「御臨終です」と云つた時には、暗黒と寂寥が地のはてまでを覆ひ尽したような衝撃を感じ、「お母さん」がいなくなつた、という悲しさで、おあわあ泣き出したのであるが、それも姉の悲しみに比べれば単純な悲しみにちがひなかつた。姉はその頃女学生であつたが学校は殆んど休み放しで母の看護に凡てを捧げて打ちこんでいた。長女である姉は年よりも重いすべての負担を負わなければならなかつた。きびしい祖母のはからいによつて、父も、後嗣息子である兄も、末娘でまだ小学生の私も病院へは入れてもらえなかつた。姉だけが母のそば近く看とりをすることが許されてゐた。私はそれでも毎日病室を見舞に行つたし、兄にいじめられ

ると泣きながら母の室にとびこんで蒲団の裾に身をかくしに行くこともあつた。ここまでならいいでしょう、と云つて敷居のところに立つて歌をうたつてゐたこともある。そんな時に母は「可哀そうに、一寸入れておやり」と云つてこつそり中へ入れてくれることもあつた。しかしそれほどなつき慕つていても母の心のなかの苦しみやつらさが少しでも理解されたわけではない。ところが姉は母と一しよにすべての苦しみを頒つてゐたのだつた。長い病床生活の間にうまれた父や祖母との微妙ないきさつ、看護婦にも頼みにくい氣ながな髪梳きや躰の手入れなど、ただそのことだけが姉の生きているすべてのように、聖母マリアに仕える修道尼のように姉は母につくしたのだつた。指環が姉の掌に握らせられたのは、その母の言いつくせない感謝やおしみや、これから娘ざかりになろうといういじらしい娘を遺して逝く心残りのすべての籠められた挨拶であつたのだ。

母は私にももう一つの真珠の指環をのこしてくれた。私はのちになつてそれをもらひ、姉妹二人はその二つの指環を守り神のように大切に持つことになつた。しかしそれらの母の遺品が姉と妹の上に持つ意味の大きき度合いには想像もつかないほどの懸隔があつたようだ。

私も子供の間にこそそれを神聖視する姉のやり方を見ならつて、この世の中でそれを護持していかしきの神秘な象徴のようにそれを護持していたが、私が生母に対して懐く愛情と追憶は、私

の成長とともに次第に、より切実で生命的なものに姿を変え引きつがれて行つた。私たちの家は海浜にあつたので、新しい母の支配する家の空気になじむことの出来ない私は、多くの時間を海に出て過した。きびしい、苛責することない自然は、偉大なものだけが持つおごりかな愛情で母が訓えのこして行つたことを私に呼びかけているように思われた。私が切に求めたのは愛情に於ても叱責に於ても偽りのない、偽る必要のないものであつた。それが最初のうちは海であつたが、次に教会になり、それから音楽に対する気違ひじみた追及に変わつて行つた。指環はピアノを弾くときに邪魔になるので、よくピアノの端に抜きとられて置き放しにされることが多かつた。私が生来持つていようとすることも出来ない弱点である品物に対する稀薄な関心は遂に母の指環に及んだのである。私はそのことで一度姉を驚愕させたことがある。

パリ滞在中、私はあるとき手製のビーズの袋を帰国する知人に托して姉に届けたことがあるが、姉がその袋を受けとつてあけて見ると中から私の真珠の指環が出て来たのである。どうしてそんなところに指環がまぎれ込んでいたのか私には分らないが、多分ピアノを弾くときにはずしてその中へ入れたまま忘れて居たのであろう。姉はびつくりして電報を打つてよこした。私にはもはや意味の薄らいでいた指環のうけ渡しだが、姉にはまだ少女のときと少しも変らない重大さでもちつづけられていて、それは何ごと

か、ただならぬことの無言の告知としてしか受けとられないのだつた。姉は私が死期迫つて指環を姉にこつつけて来たものと思ひ込んでしまつた。黒いビーズの袋も不吉な意味を持つて居るように思われたに違ひない。長文電報が何度か往復してはじめて私の姉の心配を知つて驚いたが、姉の方は私の不謹慎な粗忽さにひどく腹を立てた。それは姉にとつて裏切りにもひとしい背信行為に思われたのである。

姉がその生涯の愛情を母の追憶の中に封じこめ、そこから動かかなかつたといふことにはいくらかの説明を要する。まつたく姉はそれからあと何十年も、私たちの母が生きたより十数年も長い生涯を持つたが、その本当の原動力のようなものは、そうした母への追慕のうちに消散してしまつて、姉自身はそのかげにただ機械のように生きたのではないかと思われる。姉は母が愛していたものだけを愛し、母と一しよに眺めた世界だけに生存し、母の羅針盤が指していた限界と思われるところまで航行して行つた。しかし、そこからさきに自分の新しい生き方を拓くことは遂に出来ないままに終つたとしか思われぬ。

どうしてそのようなことが起つたのだろうか。それは、姉が母の看病にすべてをかけたことは事実である。彼女がどんなに己を空しくして母を愛し、その若い生命の血を惜しむことを知らず母に注ぎかけ、母の苦しみを負ひ、その命をたぎとめようとしたか、私はそれを知つてい

る。それはまだ何の警戒心も、独立した女性の心も持ち得ない純白な心に本能のように溢れた敬虔な愛情の奉仕であつた。姉は生涯の美しさをその時に費ひ果した。姉は母からその指環を与えられたとき、そのわずかに開き初めた花のような青春を母の死とともに押花のようにしてしまつたのである。それは事実である。しかし、それだけでは十分でない。

それでは姉が負つた母の不幸の投影があつたのだろうか。母は私を生んだあとずっと健康がすぐれなかつたらしく、須磨や垂井の別荘に出生をしてきた。そのときは私は幼くてすべて記憶の外にある。私はおどけもので、よく裸に「金時」をしてもらつて、筆笥の引手に母の帯上げを通して環にしたのを肩にかけて「須磨の綱引きヨイヨイヨイ」と歌いながら引つばつていたそうである。父は毎土曜に大阪からそこへ帰つて来たと言ふから、云わば半別居の療養生活であつたわけだ。そこにどんな遠慮や取越し苦労があつたか分らないが、姉の言葉によれば、母はその頃流行つた「一森式の坐椅子」というのを買つてもらいたかつたのにそれを云い出せなかつたとか、祖母が父に他の女性をすすめようとしたことがあつたとか云ふことである。私は一度だけ母が泣いている姿を見たことがあつた。それは私が七八つ頃で、その時は別荘ではなく母も大阪府下の海岸の町にある家にいた。その家では古くから建つてゐる母屋から長廊下を伝つて新築の二階にゆくことが

出来たが、その新築の二階の西北の廊下の隅つこに無理にしゃがんで覗きこめば、小砂利を敷きつめて櫛を植えた中庭を隔てて、母の寝ている母屋の下座敷が見おろせるようになっていた。私がある日その廊下のガラス戸の中に一人でそつと坐りこんでいると、母が机に向つて長い巻紙を垂らして何か書きながらしきりに泣いているのが眼にはいつた。私はそれを高いところからじつと眺めていたが初めてみる母の真剣な悲しそうな姿に子供心にも急にたまらなく不安になり、大声で泣きながら階段を降りて母のところへはいつて行つた。母はさりげない顔で涙をかくして「どうしたの」ときいたが私をなだめるのに一しようけんめいで、自分の方の愁嘆はどこかへやつてしまつたやうだつた。そのときは死んでしまいたいと思つていたが、小さい私をのこしてゆくことが可哀想なのでやめてしまつたのだ、と姉は後で私に話してくれた。それは姉にもよく内容はわからないが祖母との間になにかのいきさつがあつたときだつたということである。

祖母はその時代の日本の中流の家庭によく見られた、豪毅な、気性のかつた、厳格な家風の護持者であつたから、本来意地悪さや陰険さをもつた人ではなかつたが、姉と嫁という立場に立てばかなり辛いこともあつたことも想像される。父さえも祖母に対しては必ず両手をつかえて朝夕の御機嫌をうかがわなければならなかつたし、祖母はまた父に対して一家の家長として

わが子ながら一目おくとこの態度を崩さない。

母はその祖母と父に対して礼儀正しく仕えねばならないのだつたが、しかしまた一方に子供たちの母親としての位置は正しく与えられていてたとえ長病いをしてその序列は頑なに守られてかりそめにも乱されるようなことはなかつた。母は病人だからと言つて甘えることも許されない代りに、輕蔑されたり厄介者扱いされたりするようなことは起らなかつたのである。祖母が父に別の女性をすすめようとしたことがあつたと言ふのも、祖母の解釈からすればそういう母の位置にすこしでも動揺を与えるような企画ではなく、家に長くいて祖母にも氣に入りであつたうすばんやりの女中の一人に暇をとらせて父に囲わせてはどうかという思ひつきのやうであつた。それが家の外で行われることであれば、家とは無関係で、それは父の個人的宰領内の私事ということになるらしかつた。

そういう祖母との間に母が隠密にもちつづけた微妙な抗争は子供心にも何ほどかの印象を与えていたのであらう。それについて私は一つの場合を思い出す。そんなことは前にも後にもただ一度のことなのであときが脱落してその一つの場面だけがありありと残つていたのであるが、母が私たちに踊りを教えてくれたのである。病床から起き上つて頭を櫛巻にした母が、手を拍つて足拍子面白く踊つている。姉と私がその後につづいて同じように踊りながら座敷の中をグルグル廻つて歩くのである。その唄は「相撲

とりさんだちや朝から晩までブンゴの米くてお結構お結構」という不思議な歌詞とふし廻しをもつていて、ただビヨコンビヨコンと跳ぶやうに足をあげては手を振るという踊りとも云えない、滑稽で単純なものであつたが、その時の母の心の底から解放されたやうなよろこびの姿は子供心にもたのしく忘れることが出来ない。

それは祖母が外出して家をあけた時のことであつた。祖母がいなくて云うことだけがそれほど欲喜であつたのか、それとも他にもつと喜ばしいことがあつたからかは分らないが、祖母の時たまの他出が母をそんなに子供のやうに浮かせ、それが子供たちにまで伝わつていたことはたしかなことであつたやうに思われる。歌の文句は不可解なものであるが、不自由な境遇にいるものが他人の幸福を羨望する意味のものである。たぶん母が幼くて郷里にいた頃奉公人たちでも歌つてゐるのを聞き覚えていたのであらうが、歌の意味するものはその時の氣持にも通うものがあつたに違いない。

私の姉が母のそのような弱い立場の上に加えられた苦しみをとにも煩つていたとすれば、姉の追憶がそのために一層哀切を加えていたであらうことは容易に想像される。しかしそれにしても、姉の生涯がそのために変えられねばならなかつたほどそれが重大なものであつたとは私には思われない。

それからまた、私に忘れることの出来ないのは、姉が母の死に臨んで幼少の私の上に残して

行つた心づかいを引きついで、私に片時も眼を離さぬほどの撈りをかけてくれたことである。

私もそういう姉を慕い歩き、いつも姉の姿を見失わないようにと油断しなかつた。姉が厠に行くときには戸の外に立つて待つていたほどである。そして私たち姉妹の間には母を僥^{よう}ぶ強^{かう}靱^{きう}な盟約が出来上り、二人でせり上げるように母の偶像を大きくして行つたこともたしかである。私たちは夜も母の位牌のある仏壇の前でしか眠らなかつたが、その仏壇の扉は夜中でも必ず二十センチほどは開けておかれた。「お母さんが息苦しいから」と言うのだつた。私は毎日毎夜、姉のそばに並んで坐つて仏壇に掌を合わせて、母に語る姉の言葉をきいた。「おかあさん、今日は運動会で鉛筆を一ダースもらいました」「おかあさん、このお菓子木村さんの小父さんに頂きました」「おかあさん百日草が咲きました」……

しかし、そういう少女らしい願いはそのままに放置されればいつまでも燃えさかつているものではない。

姉の断乎として母の志に生きようとする決意を固めさせたのは、その姉の願いに敵対する者が現れた時であつた。人間の志操は愛情の中に於てよりも憎悪のなかに於て一層強く長く生きるものと思はれる。父が新らしい母を迎えた時から姉の人生ははじまり、姉の生きる道はきまつたとさえないことが出来るであらう。

何も知らずに嫁して来た新らしい母にとつて、

そのような暗流が待ちかまえていたことは気の毒なことであり、またさぞかし迷惑なことであつたろうと思はれる。姉は新しい母をうけ入れることが出来なかつたばかりでなく、生母の見えざる生命を自分のなかに延長して、嫉妬や怨恨をさへ感じなければならなかつたのである。どのような母もそんな姉に抵抗を感じさせないで済ませることは出来なかつたに違いないが、そのとき私たちの上に擬せられた母は特にその氣質や教養や意見に於て、生母と対照的なものを持ちすぎていた。祖母はすでに世を去つていたので一家の空氣は隅々までこの継母の色によつて染めかえられてゆくように思われ、それが姉を鋭く刺戟せずにおかなかつたのだ。私たちの父は祖母や母と一しよにいたときは旧弊な律義者ながらどこか頼もしい人物として子供たちの眼に映つていた。ところが継母が来てからは、父は相好を崩して笑つたり、時には継母にやつつけられたりするやうなことが起つた。継母の感情の表現は手輕でしばしば露骨であつたので姉妹はそれを見て動揺した。それは二人の眼には許すべからざる野卑として映らずにいなかつたのである。父に対する態度ばかりではない。朝夕の挨拶の仕方、食膳の作法はもとより、家の中で歩き方、笑い方、物の言い方、女中を呼んでものを云いつけるとき、出入りの商人のあしらい方、客に応待する仕方に至るまで、何処かに全く異質のものがひそんでいるように思はれてならなかつたのである。或は姉妹の方で

無理に異質なものを嚙み出していたのかも知れないが、姉妹は——殊に姉は——ことごとく生母の時代の仕きたりを回想し、それに對比して古い家の風を守ろうとした。滑稽なことに、それらの中には本当は母の欲した仕方ではなく母がやむを得ず服従していた祖母の流儀も入つていたのであつたが、姉にはそんなことを省る余裕はなかつた。ただやみくもに伝統的な習慣を守ろうとし、「母にはこれだけのことが許されていた」とか「こうするのが家のやり方だ」とか言いたて、生母時代の料理を作つて父に故郷の味覚を思い出させようとしたりするのだつた。姉はすでに少女でもなく思春期の娘でもなく、侵略者に対抗して城砦を守るべく運命的な闘いに立ち上つた一個の女性であつた。二人の女性の間に宣せられたたかいは勿論眼に見えるところで行われたわけではない。しかし女中の任免や、仏事や、時々行事をめぐつて火花をちらすさまじさであつた。しかしこのたかいは何と言つても継母がいつも圧倒的に優勢で、姉は守勢であるより仕方がなかつた。姉は兄や私を糾合して神秘的な同盟をつくつて対抗するより道はなく、この同盟に裏切り者が出ないかどうか監視することの方が姉の主な仕事になつていつた。兄や私のようなどこか間のびした性質をもつた人間にはその同盟はいくらか陰気で窮屈なところがあり、しばしば姉の叱責と不興を蒙らなければならなかつたが、それでも三人の兄妹が未婚の間は、その子供じみた同盟はど

うにか無事につづけられていた。

一番さきに結婚したのは姉であつた。ところが、驚いたことには、姉はその結婚生活にまで兄妹に対する愛情を持ちこんで行つたのである。そんな不思議な神秘にとりつかれてゐる姉には恋愛もまた一種の裏切り行為であつたから、彼女は年齢と慣習に従つて親の命ずる家に貰われて行つたにすぎない。姉が嫁して行つた先の家は女中を十人使つてゐるというふれ込みであつたが式がすむとそれが一人ずつへつて行くという超弩級の怪奇な組織をもつた家であつた。彼女はおそらくそこで珍らしい経験をもつてゐるが、それは狭い単純な娘時代の見聞をもつては到底消化しきれない種類のものではあつた上に、彼女の好奇心も順応性も未開で生硬であつた。まだまだ母親への誠実と同種類の愛情で通用すると思ふほどの迂濶さであつた。当然のこととしてそれは見事に失敗して彼女は生れたばかりの女の子（月子）を婚家に残して実家へ戻らねばならなかつた。

彼女が家に帰つて来たときまだ兄と私は未婚のまま実家にいた。姉はまた、それが一ばんお手のものである母性愛の陣地に後退してそこに不遇な身の上のはけ口を見出した。しかし私たちはもう成長してゐて、それぞれ勝手な生活をしながら適度に姉と調子を合せていたと言わなければならぬ。調子を合わせる、と言つては腹黒いようであるが、実のところ私たちはもう父や母の間柄を前の母との比較で心配するような時期は過ぎていたし、七面倒臭いしきたりを楯にとつて陰鬱な反逆をくり返すことには興味を失つてゐた。私も兄も抑えきれないような、いつばいの知識欲や好奇心に駆りたてられていたし、思春期らしい冒險精神も開かれてゆかずにはいなかつた。兄はそれから次第に大胆な青年の放浪に走つて行つたが、私は結構自分の生活をひろげながらときどき勝手なときにだけ鬼ごつこの陣地に歸つてゆくように姉の羽がいのの中に歸つて行つた。

姉は第二の結婚で、さきの結婚生活の失敗から得た教訓を生かして油断なく立廻つたであらうが、神聖同盟をそこへ持ち込むことだけはやめなかつた。その家で姉は、私のために夫のよりも大きく見ごとなお頭つきの魚を取つておいでたべさせるというやうなことをした。また誰にも使わせない柔らかな上等の蒲団を私に使わせ、子供のときと同じように自分の傍に寝させた。私の滞在が何日に及んでも、それは少しも変えられなかつた。私は自分が義兄よりも大切にされてゐるということに不安をかんずるほどだつた。時々訪ねて行く父が特別の大歓迎を受けたことは言うまでもない。継母の粗野で不行届の心づかいの中に取りこめられてさんざんな目に合つてゐる哀れな父（と姉は考へてゐた）を慰め、すべてのことが正しく進行されてゐた懐しい生母の時代を父に思い起させるのは、この時とばかり、姉は夢にも忘れない過ぎ去つた昔の「母の料理」のかずかずをそろえて父の食膳に供えるのだつた。ところが食味に恬淡な父はどれほど美味なものを食べさせられても反感のない顔をしてゐるので、姉はますますやつつきになつて何かの形で真情を示そうとする。しかしそれは真心であると同時に継母に対する反抗でもあるので、そういう面倒なからみつきの嫌いな父はいくらか迷惑そうであつた。

姉の真情の披露の仕方は時々気違いじみてはいたが少しのかけ値もないものであつたことは書きしるしておかねばならない。その時分私は二年間程入院生活を送らねばならなかつたが、姉はその間その七八百日というもの一日もかかさず私の病室を見舞つてくれたのである。二年間のうちは酷暑猛暑の日もあり、傘をさすことも出来ないやうな嵐の日もあつて姉が部屋に入つて立つとそこに水たまりの出来るやうなことがあつたが、姉はその間も必ず何がしか私を慰める品物を懐にしのばせて市電をのりついで十分分もかかるその病院に通つてくれたのであつた。

それが裏切りであるかどうか知らないが、私も兄もやがて結婚してそれぞれの生活にはいつてしまった。私もやつぱりいく分姉と同じような盟約氣質を結婚生活に持ちこんだけれど、結婚によつて姉との間柄が次第に冷たくなつて行つたのはやむを得ないことであつた。それは私の氣持が變つたからではなく私の立場が變つたから、私はもう姉の庇護を必要とする弱者ではなかつたし、生活的にはむしろ反対に私の方が姉よりも余裕のある環境にいるようになったこともそれにあづかつていたであらう。姉は学校教師という義兄の職業から、限られた収入と交際範囲の中に閉じこもつていなければならなかつたのに、私の方はやや自由で広闊な生活の範囲を持つていた。私は自分が着物をつくるときには着物の好きな姉のためによく自分のより上等の着物を姉に贈ることがあつた。姉こそはまづ美しく装わるべき人であると思つたからである。すると姉はそれを坊主が善哉善哉と言つてとぼけた顔で寄進物を懷ろに入れるように格別うれしそうな顔もしないで嘉納した。姉はそうして私を「物質的な人間になつた」と言つて非難した。

しかし「物質的」という非難は姉の貧しい語彙のなから取りよめに選ばとられた言葉であつて、本当の理由は姉妹の運命の不平等に対する憤りであつたと思われる。姉に生れつき類いまれな美しさに恵まれ、長女であるためとくに念入りに女一通りの芸事も仕込まれ、大きい誇

りを抱き、将来についての予言的祝福を周囲の人たちからおくられてゐた。姉は自分が沈滞した生活の中にいるのに引きかえて、その庇護がなければ木から落ちた猿のように醜く無力であつた私が当初の志望を貫いて自分の勉強を続け、外国に留学し、何人も子供を持ち、女中を使つて手にひびを切らすこともない生活をする事が、信じられない不合理と見えるのだつた。姉が仮りそめに用いた「物質的」という非難の言葉は彼女の奥底の不満を言ひあててゐた。姉の脳裡には早くから自分こそ神の恩寵をうけた特別な人だという、ひそかな確乎とした自負があつたようである。姉が継母に対抗して母の映像を守り、凡ての愛情を母の線に固定させてそれ以上に成長も発展もさせなかつたということのなかには、姉の自身に対する過度の愛情や自分の特別の優位を守ろうとする心の働きに近似したものが認められるかもしれない。

この頃のある時期以後、姉の私に対する態度は抑搦と冷視と幼い愛情の入りまじつた不思議なものになりかわつて行つた。その一方に姉は義兄を追づれにますます深く穴の中に入りこんだような生活に向ひ、ひそかに異様な自己愛を募らせてゆくようであつた。

戦争の末期から終戦へかけて私たちは誰でも、貴金屬や宝石を使つた指環や時計のようなものを持ちつづけにくい事情に遭遇した。

私が間違つて黒い袋に入れて姉に送つたブラ

チナ台の真珠の指環は帰国したとき姉からのお叱言と一しよに返してもらつて私の手許に無事に保存されてゐたが、戦争の様相が悪化して何度目かの貴金屬類の供出が奨励されたとき、私はそれを百貨店の供出取扱所へ持つて行つた。

私にしても指環の供出がもう国運の恢復に役立つと思つたわけではなかつたが、国が敗れ去つたとき、まだそれを残してゐたという成りゆきがいやだつた。毎日毎夜、空を焦がして燃えつづけた都市の大きい破壊、人命が惜しげもなく潰されてゆく凄惨な地獄風景が、物についての私の考えを虚無的にしてゐた。しかし私は姉は決して自分の指環を手放すことはあるまいと思つてゐたから、問い合せの手紙も出さなかつた。そのうち姉の魚崎の家は終戦間近いある日の空襲で家財もろ共焼失してしまつた。姉夫婦は灰燼の中を身一つで逃れながら八月十五日の朝、中央線をまわつて東京の私の家に辿りつゐた。

それから私は私も姉も苦しいことの連続であつた。義兄は学校に復帰することになつて関西に發つて行つたが、住む部屋が無いために学校の一室に自炊して寝泊りし、姉は私の新しい独り住みの手狭な家に病氣がちの体をあずけてゐた。家を探すためにも生活を建て直し心身の疲れを恢復させるためにも金を工夫せずにはゐられない状態であつた。私は姉もこうなつてはあの指環を手放す氣になつたのではないか、と思ふことがあつたが、やつぱりたずねることは出来なかつた。姉が罹災した時の話では突然頭上に

降りかかつてくる数十個の焼夷弾の恐ろしさに枕もとに置いておいたりユックサックさえ取り出せなかつたと言うので、「おかあさんの指環や貴金屬類は」と私が尋ねると、姉は「もう何もかもすっかり焼いてしまつたの」と言つたからだつた。しかしもし姉があゝの指環を焼いてしまつたのだつたら、姉はもつとはつきり嘆きかなしむ咎であつた。私は姉の言葉つきから姉がまだそれを持つていると感じとつた。そしてそれならば何故「無事だつたのよ」と打ちあけて言つてくれないのだろう、と物足りなく思つた。しかし、姉にしてみれば、一たん、打ちあけてしまえばもうそれを持ちつづけられなくなるかもしれないことを怖れたのに違ひない。姉たちの生活は事實墮ちられるところまで墮ちたという手応えをかんじさせていたし、自分の窮迫のためにも他人への義理のためにも手放せるものは手放さなければ具合が悪いような状態だつたからである。とにかく姉は指環のことに触れることをひどく嫌つていた。

私にはそんな小さいダイヤの指環がたとえその頃で金で一万か二万に売れたとしても、姉たち夫妻が戦災以後二三年の間に墜落して行つた悲惨な痛苦と困窮の極限——義兄はそのために亡くなつた——を救い得たとは思われぬ。またその後の、他人の援助によつて支えられた更に三年の療養生活にどれだけ足しまえになつたかと言えば、おそらくそれは言うに足りないものであつたらう。しかし私は姉がそれを義兄の

苦しみをほんの少量でも減ずるために投げ出してしまわなかつたことを哀しく思わずにいられないのだ。義兄は最後まで、教壇で声が出なくなつて、もはや何びとも立つて働いている義兄を正視出来なくなるまで他人に憐れみを乞わなかつた人である。義兄はそのとき、ようやくのことです市内に探し出すことの出来た二間の住居に姉を呼び寄せ、その姉の病が篤くなり、自分もまた極度の疲労と栄養障害から夫婦で市外の病院へ送りこまれてそこでまた姉の看護をしていたのであるが、その孤独と克己心はむしろ度を過して、そのことを考える度に周辺のものは彼から頼られも信じられもしなかつたのではあるまいかというきびしい無言の抗議をつきつけられたような哀しみをさえ覚えずにいられないのだつた。一人の老教授が死に至るまで無言であつたと言うこと、彼が十二月初めに教壇から休養をとり、一月二十二日まで病妻のために米を炊き、二十三日無理矢理に診察せられてもはや絶望状態であることを発見せられ、二月一日には遂に死亡した、そのことの中には、勿論妻に対する憐れみもあつたであらう。しかし、自分の病気が客観的に断定されることが、唯一の生存の道である教職からの後退と、学生達からの別離の宣言であることに耐えられなかつたのに違ひない。私はその追いつめられた、一物も持たない山上の療養所の仮住居に看護と自炊の生活を送つていた義兄の心を使うとき、いつでも激しい哀しみに胸を引きさかれずにいない。

私は姉がそんななかで光る石を、どこかに持つていたということを考えると寂しくてやりきれないのだ。しかし、姉がそれをあらゆる犠牲に於いて護持し通したということが單純な欲望のためでないことも確かである。指環はすでに姉のなかで金銭に換算しうる物質ではなくなつていたに違ひないからである。義兄の息が絶えたとき、私と附添婦は壁一重向うの部屋に寝ている姉を抱きかかえるようにして義兄の傍につれて行つた。姉はハンカチを顔にあてて、大きい真綿蒲団の中に円くなつて泣いた。どちらが亡骸かわからないような影の薄い姉の姿だつた。三十分程、姉と私は義兄の新しい状態——死人と呼ばれる——をとり囲んで動揺していた。やすやすと受け入れかねる悔恨や驚愕の激情と悲痛の思いが黒々と少部分ずつ、しつかり、侵して行つた。そして悲しみの中から私の心を最初に気づかせたのは姉をこのまま斃してしまつてはいけないということであつた。しかし、それと同時に私は、姉が衝撃のあまり直に義兄のあとを追うことを極度におそれながらも、心の底では姉がたぐさんたくさん悲しんでくれればよいと思つていた。私は姉に唯一人の頼るべき夫を亡づたという心細さと、姉自身の病状が危険だと言う点ではどんな非常手段を尽しても姉を護り抜きたいと思つた。しかし、姉が純粹な悲しみや感謝や別離の耐え難さのために身の安全を忘れてくれることを望んだ。私はどのような夫婦の場合にもそれほど期待を持ちしな

しかし私はその病人が姉であるということのために、姉にとつて私が「肉親」であつたように私にとつて姉が「肉親」であるということのために、私は姉の生き方や姉の愛情のどちらにむしろ嫌悪をかんじながら、その一刻でも長く生きのびたいと妄執のように願う姉の心に沿わずにいられないのだつた。私はその姉のために、この病院を片思いのように愛し、多くの人の非難にさらつて自分が家賃滞納の居残り借家人のように厚顔になることをどうすることも出来なかつた。それが忘れられた遠い過去の「盟約」の残映であるかどうかは知らないが、それは姉にあつた肉親への偏愛が別な形で自分のなかにも生きていたのではないかという問いかけを自分にせずにはいられないほどだつた。もとの療養所にいたある夜、嵐が襲つて大きい音をたてて扉がおおられ、窓ガラスが砕け散つたことがある。姉は恐怖に脅えて呼吸が變つた。私と附添婦が釘と金槌をさがしてボール紙をうちつけ風を防いだり、姉の傍にいて夜通し手を握つていて、姉の危険は救われた。私はいつもつき添つていられない姉がそんな恐怖で死ぬのがいやなのだつた。想像されうる様々の不測の危険からこの病院は安全であつた。この病院での看護上の常識や責任感私は安堵させるに足りた。私はその保障がなくては姉と離れていることが出来ない。私はどんな苦しみや恥に耐えても自分の体を防壁としても姉をこの病院に留らせ、ここで運命の帰着を見とどけたいと思ひ

定めた。

しかし姉は私の心もちとは全く別な場所ではないよ！鋭く病氣克服の闘志をみがき、孤独な自己愛を深めてゆくらしく見えた。姉の眼にはすべての健康者の存在がうとましく、憎むべく、無礼醜薄なものに見えたかもしれないが、私はその代表者のように映るときがあつたらしい。私は生涯にまだ一度も経験したことのないようなこと、他人の同情をうけ、人の非難に頼かぶりし、利益のために商人と交渉し、精神と肉体の疲労から昏倒するまで働いたが、それはみな死に臨んだ姉だけが私に命じることであつた。それにもかかわらず、姉は私の誠実を疑い、私を警戒し、私が療養資金に行きづまつて義兄の本を売るために奔走したときには、私がその売却金を横領するのではないかと恐れて私に直接金を渡さないようにと指令を発し私を窮地に陥れた。私だけならまだしも献身的に姉の身辺の雑用を見、会計を預つていくる学生に對してさえも、姉はいつも口にするこささえも恥しいような嫌疑をかけていた。姉はまた絶えず自分が受けている窮乏と虐待を手紙でうつたえて来たが、私が行つて見ると附添婦の話では、姉はその高級な病院の中での患者よりも十分の榮養をとつていると云うことであつた。私はまたその病院の主治医が医師としての立場からまたたく寛容誠実であつたこともよく知つていた。最初、職務に斃れた教授夫人として迎え入れられた時の厚意は、姉や私の失格にも拘らず主治

医の人格に於て堅持されていた。その意味に於て、主治医の行為や心は姉とも私とも関りのないものと云えた。(私は親切がそのように独立して冷淡に行われる場合にだけ信頼を持つことが出来るのだ。)

私は姉の上に行われているすべてのことがどれ一つでも義兄の場合に比べて天地の隔りがあることを思い、義憤に似たものを感じ面をそむけずにはいられなかつた。

私は嘆息し、心の中で叫んだ。

「あなたはこの地上で誰を信じ誰を愛しているのです。たつた一人の娘の月子をさへ愛していないお姉さん、あなたはお義兄さんのところへいらつしやるのが一番いいわ」

私はそう思つた。姉が愛していた父も兄も、それから母もみんな死んでしまつた。私たちは長く地上にすぎたためにこんなに浅ましくなつたのだろうか。私は憤り、姉を見放し、すぐそのあとからわあつと泣き出したほど幼い悔いの涙に襲われるのだつた。

時々私の家の窓から投げこまれていたおびやかすような姉の手紙が次第に間隔をつめ、訴えと呪詛を深刻にしてゆくことで私はいよいよ最後の時が近づいたことをかんじていた。それは偉大な交響樂の終樂章のような莊重な繰り返しの私の胸をしめつけた。姉の手紙の中に呼吸の苦しさを精神の乱れを見出すと、私はそれを見たあと二三日は仕ごとにも手につかないような苦